教育

教育に関するご意見や情報をお寄せください
社会部教育班
電話
098（860）3552
ファクス
098（851）5300
※日・水曜日に掲載します。

離島留学 かける夢

久米島高校ルポ

生徒 未来描く新天地
学校 地域振興に期待

街灯もない夜道に、影ができるほどの月明かりが差す。都会では目にしたことのない自然の雄大さ。荒井竜馬君（16）は「この島に来てよかった」と心底思った。（鈴木実）

荒井君は久米島高校の1年生。東京の中学校を昨年春に卒業後、世田谷区の実家を離れて久米島町に単身渡った。

「中3になって進路を考えてみると、関東を離れて外の世界に出たい思いがどんどん膨らんできた。離島医療に関心があるので、ここならちょうどいいと」。普通科の特進クラスで学び、医学部進学を目指している。

久米島は、那覇空港から飛行機で30分余。1950年代半ばに1万7千人を超えていた人口は現在、8300人ほどに半減した。ここ10年は毎年100人近くのペースで減少している。

島で唯一の久米島高も、生徒不足に悩む。

1学年に普通科2学級、園芸科1学級の計3学級。定員は各学級40人の計120人だが、2004年以降は入学者の定員割れが続き、10年には充足率66%に落ち込んだ。

県教委の計画では、このまま改善が見られなければ16年度をもって園芸科が募集停止になる。

危機感を覚えた町や町教育委員会は、島外や県外からの生徒を受け入れる“離島留学”に乗り出した。県外から沖縄の高校を受験するには島元保証人が必要だが、島の里親がそれを兼ねる仕組みだ。

おととしに初めて東京と大阪で開いた説明会には、保護者ら約60人が訪れた。

町教委の担当者は「参加者ゼロも覚悟していたが、都会とは違う島の環境に魅力を感じる保護者は予想以上に多かった」と話す。

船出の年となった本年度は県外から2人、沖縄本島から3人の計男女5人が入学した。うち4人は、町教委が探した島の里親と暮らしながら学校に通う。

半嶺満男校長は「島の外から来た生徒は部活に励んだり、農作業を楽しんだり。これまで女子生徒ばかりだった生徒会も、荒井君たちが加わって活気づいた。すっかり島に溶け込んでいます」と喜ぶ。

2年目となる来年度も東京や神奈川、沖縄本島などから10人ほどが入学を希望している。

半嶺校長は「島の中学生だけでは、定員を満たすだけの絶対数が足りない。島外、県外から生徒が来れば、たとえ卒業後に故郷へ帰ったとしても、5年後、10年後に島の応援団になってくれるはず。地方創生のモデルケースにもなれる可能性がある」と期待する。

現代版組踊の練習をする中村将真君（前列左）＝12月19日、久米島町農村環境改善センター

■魅力伸ばす

久米島高の長所は、小人数ならではの面倒見のよさや地域社会との結び付きの強さ、豊かな自然など。こうした優位性をさらに伸ばそうと、地元の商工会や町議会、保護者らは「久米島高校の魅力化と発展を考える会」をおととし発足させた。高校と密接に連携を取りながら、さまざまな取り組みを進めている。

園芸科で作った花や野菜を地元の飲食店に提供したり、島内の事業所の協力でインターンシップ（就業体験）を実施したり。学校のカリキュラムも、地域の歴史や文化を学べるように工夫している。そのためか、ここ3年は入学者数も回復基調だ。

1年生が総合学習の時間に取り組んでいるのは、15世紀の久米島の英雄・笠末若茶良（ぐすくわかちゃら）を題材にした現代版組踊。荒井君も、主要な登場人物を演じる。「恥ずかしいですね―」と言いながら、年末の発表会に向けて演技やダンスの練習をしていた。

一緒に汗を流していたのは、すっかり仲良しになった中村将真（まさき）君（15）。中村君も、川崎市から久米島高に入学した。毎週火曜日にはFMくめじまに出演し、島ではちょっとした有名人だ。

「同じ放送部の友達と雑談することもあれば、ゲストを呼んで話を聞くこともある。この前は、内容が脱線し過ぎて怒られちゃいました」と屈託がない。

「中3になって久米島高校の募集を知り、『これは面白そうだ』とピーンときた。母親は最初『うーん』という感じだったけど、何とか分かってもらえました」

農業体験はなかったが、「せっかく離島に行くなら農作物や食について学びたい」と園芸科に。里親の畑作業を手伝ったり、ヤギに餌をあげたりと、充実した生活を送っている。

■里親が課題

荒井君の里親は、赤嶺實さん（63）、るり子さん（63）夫妻。ともに元教員で「島のためになるなら」と引き受けた。5人の子どもたちがすでに成人し、部屋が空いていることも後押しした。普段の弁当は息子夫婦が用意してくれる。

学校までは5キロほど。荒井君は自転車で通学する。

一緒によく海に行くという實さんは「釣りも貝拾いも楽しんでいるよ。ダイビングも勧めたら、すぐに資格を取っていたな。東京でできないことをたくさん体験してほしい」とエールを送る。

るり子さんは開口一番「野菜を食べないんです。それが困る」と苦笑い。「夕食後も私が座っていると、家族のことや学校のことをずっとしゃべっている。ホームシックになっている様子は全然ありませんね」と、新しい“息子”を歓迎する。

人口の限られた久米島にとって、里親探しは大きな課題だ。生徒側が里親に払う月額6万円のうちで、町側は2万円を支援している。

来年度の入学希望者の中で、里親が必要なのは7人。関係者が走り回って協力家庭を見つけたが、高校3年間の世話をするのはハードルが高い。

里親と留学生の相性もある。「ゼロ校時」がある普通科は登校が早いため、遠隔地の里親家庭からは通いにくい。自分の子どもとの組み合わせを考え、どちらかの性別を里親側が希望することも珍しくない。

解決策として、町は寮の整備を検討している。ただ、財源や規模などの詳細はこれからだ。

■寮と公営塾

県外や島外から生徒を呼び込むためには、学習環境を充実させることも重要な鍵を握ると町はみている。「十分な学力が身に付くのか」といった不安を持つ保護者も多いためだ。

早ければ来年度から町営塾を始め、一人一人に合った学習支援や進路指導に力点を置く。地域おこしに関する国の補助を活用しながら、数人のスタッフを確保する方針だ。寮と公営塾の機能を合わせた施設整備も視野に入れる。

町プロジェクト推進室は「単なる学習塾ではなく、島全体を学校としながら地域のことを考えられる若者を育てたい」と目標を描く。

音楽の授業で、友達と笑い合う荒井竜馬君（中央）＝12月18日、久米島高校

全国で小中高70校超
離島留学 希望者数伸び悩む

日本離島センター（東京）によると離島留学は約30年前に新潟県・佐渡島で始まり、九州地方を中心に広がった。小中学生が1年間、地元の受け入れ家庭（里親）や寮で暮らして、島の学校に通うのが一般的。2012年11月現在、全国で小中学校約70校と高校4校が実施している。

過疎対策の一環で始めた自治体が多いが、近年は全国的な少子化を背景に留学希望者は伸び悩んできた。

受け入れ側の島民の高齢化で里親になれる家庭が減少し、留学生の募集を断念する学校もある。